Jane Eyre 批評史における *The Life of Charlotte Brontë* (II)

杉村　藍

I　はじめに

Mrs Gaskell (1810-65) が執筆した *The Life of Charlotte Brontë* (1857、以下 *Life* と省略する) は、出版されると同時に Charlotte Brontë (1816-55) の生涯だけでなく、彼女の代表作 *Jane Eyre* (1847) の研究にも直接、間接にさまざまな影響を与えてきた。拙論「*Jane Eyre* 批評史における *The Life of Charlotte Brontë*」では、*Life* が *Jane Eyre* の批評に与えた影響を、出版当初から第二次世界大戦が終結する 1945 年までにわたり概観したが、ここでは 1945 年以降現在に至るまでの *Jane Eyre* 批評を通して *Life* が作品研究にもたらした影響を考察してみたい。[1)]

II　第二次世界大戦後～1960 年代

Jane Eyre 研究の動向は、その時代や時代の主流となる文学研究の手法と敏感に連動している。20 世紀も中葉を迎えると、価値観の多様化が一層進んだ。*Jane Eyre* 批評に関しても、初期作品やケルトの要素を研究に取り入れるなど関心は多岐にわたり、そこに出版から 100 年近い年月を経た *Life* の直接的影響を指摘することは非常に困難である。特に、この時期には *Life* に端を発する伝記的研究が大きな転機を迎えていた。第二次大戦前後の文学批評運動の一つとして、New Criticism が浸透してきていたからである。

New Criticism は作品を歴史的、社会的背景や文学史的関連、あるいは作家の伝記的事実から引き離し、作品の形式面を研究の対象とする批評の方法である。[2)] 伝記的事実を文学研究から排除するという New Criticism の流行は、そのまま

Life を *Jane Eyre* 研究から排斥することを意味していた。つねに Charlotte Brontë の作品研究と深い関連をもち続けていた *Life* は、その存在意義を否定されようとしていたのである。

実際に *Jane Eyre* 論のなかには、*Life* をはじめとする伝記的事実との関連にはまったく触れず、作品のイメジャリーや用語に注目した論文が登場する。作品に見られる現在時制に注目した Edgar F. Shannon Jr の "The Present Tense in *Jane Eyre*" (1955) や、四元素を主としたイメジャリーを考察する David Lodge の "Fire and Eyre: Charlotte Brontë's War of Earthly Elements" (1966) などがその例である。

一般に New Criticism が小説に援用されるようになったのは 1940 年代に入ってからであるが、しかしここに挙げた論文はいずれも 50 年代、60 年代に発表されたもので、New Criticism が流行的に高まった時期からずれている。これは、*Jane Eyre* 批評に関しては New Criticism の浸透が他の文学作品よりも遅かったことを示している。このような時間的な「ずれ」はなぜ生じたのであろうか。

考えられる問題点としては、New Criticism が小説にも用いられるようになった 1940 年代が、Brontë 研究者にとっては特別な時期に相当していたということであろう。1946 年は姉妹の最初の文学的冒険であった *Poems by Currer, Ellis and Acton Bell* (1846) の、そして翌 47 年は *Jane Eyre, Wuthering Heights* (1847), *Agnes Grey* (1847) の、それぞれ出版 100 周年という記念すべき年であった。この他にも Branwell (1817-48), Emily (1818-48), Anne (1820-49) の没後 100 年、さらに 50 年代に入ってからは Charlotte 自身の没後 100 年と、Brontë たちの生涯とその作品をめぐる重要な節目の時期がちょうどこのころに集中していたのである。[3] 1940 年代後半から 50 年代半ばにかけ、100 周年という記念すべき時期を迎えた Brontë 姉妹には、いやがうえにも多くの関心が寄せられた。特に *Jane Eyre* をはじめとする三姉妹の最初の小説の出版 100 周年にあたる 1947 年と、Branwell, Emily の没後 100 年にあたる翌 1948 年に発表された Brontë 関係の文献の数は、他の年に比べて明らかに多く、人々の関心の高さを窺わせる。[4]

姉妹の作品が迎えた 100 年という時の重みに対する関心は、当然のことながら 100 年前にそれらを執筆した作者自身やその時代を意識しなければ生まれるはずがない。このころの研究家たちは、まさに New Criticism が否定した歴史的、

伝記的事実に注目していたのである。*Jane Eyre* 批評に New Criticism が浸透するのが遅れたのはこのためであったと思われる。しかも、New Criticism の批評運動は、その手法が小説に用いられるようになって以後は短命であった。1950年代になると早くも見直され、広く用いられることがなくなっていたからである。[5] こうして Brontë 研究の方向と New Criticism そのものの通用期間とから、これが *Jane Eyre* の伝記的研究に与えた影響はわずかであった。*Life* に端を発する伝記に基づいた作品研究は、New Criticism によって抹消される危機に立たされた。これは出版後ほぼ100年というこの伝記の歴史のなかで、研究対象としての価値を否定される可能性をはらんだ、重大なターニング・ポイントであった。しかし *Life* はこれを乗り越えた。*Jane Eyre* 批評の不可欠な研究材料として、*Life* は次の時代へとさらに引き継がれていったのである。

Ⅲ　1960年代後半以降

Life をはじめとする伝記研究は、New Criticism の流行の後、新たな形でその重要性を一層増していった。それはフェミニズム研究と連動することであった。フェミニズムは1960年代後半以降顕著に見られるようになった文学批評で、女性という視点からさまざまな文学作品を読み直そうとするものである。フェミニズム批評は20世紀後半の文学批評の一大特徴となるほどの発展を遂げたが、これは S. Freud (1856-1939) が創始した精神分析学と結びついたためであると思われる。Freud は無意識、特に抑圧された性の潜在意識の重要性を主張した。そのため女性・男性という性差に強い関心をもち、性の意識を抑圧された女性に注目していたフェミニズム批評は、これと結びつきやすかったのであろう。[6]

フェミニズムは精神分析学の手法を用いて、登場人物や作者の、作品には直接描かれていない潜在的な心理を読み取ろうとした。作品から作者の深層心理を汲み取ろうとすれば、その裏付けとして作者自身がどのような環境に育ち、どのような人生経験をもっているのかを知る必要があった。伝記は作者の性格形成や行動の特徴を記録した直接的な情報源である。*Life* をはじめとする伝記研究の需要は、精神分析学がフェミニズム批評と結びつく度合いが高まるにつれ増していったはずである。

しかも *Jane Eyre* は、フェミニズム批評の最適の研究対象であった。作品が女性作家による女性を主人公とした物語であること、作中で男女平等の理想が述べられていることなどがその主な理由であるが、そのほかに、作品と作者の実人生との関連を求めやすかったことも重要なポイントであった。Charlotte の場合、彼女の人生経験は小説のなかにかなり直接的に反映されている。作中に作者自身の声や体験の投影を見出しやすいということは、それだけ作者の心理に近づく材料が豊富にあるということである。しかし、こうして作品と作者の実人生の深い関連を指摘するためには、作者の伝記が体系的によく研究されていることがその前提となる。作品から直接読み取ったものに加え、伝記が作者の深層心理を研究する際の強力な論拠となるからである。この点で、Mrs Gaskell の *Life* は、作品と作者を結びつける有力な媒体としての機能を発揮している。以上の点から、女性作家の書いた女性の物語という枠組みをもつ *Jane Eyre* は、さらに *Life* というバックボーンに支えられ、フェミニズム批評にとっては格好の研究対象となっているのである。

さて、それでは Mrs Gaskell の *Life* は *Jane Eyre* のフェミニズム批評に具体的にどのように関わっているのであろうか。R. W. Crump によると、Brontë 姉妹の作品に本格的にフェミニズム批評が見られるようになったのは 1970 年であるといわれ、一般的な文学批評の動向とほぼ重なっている。[7] この時期のフェミニズムに基づいた数々の *Jane Eyre* 批評のなかでも代表的なものとして Helene Moglen の *Charlotte Brontë: The Self Conceived* (1976) が挙げられるであろう。

Moglen の *Jane Eyre* 論はこのころのフェミニズム批評の一般的な特徴を顕著に示しており、深層心理学、性の意識を主要な問題意識としている。そしてそれらをフェミニズムと結びつける土台として、作品と作者の心理的つながりにも注目している。

> The novel [*Jane Eyre*] is a perfect fusion of experience and invention. The trauma of Cowan Bridge is there, the dreary years spent as a governess, the thwarted passion for M. Heger. And there are more subtle truths: the ambivalence of Charlotte's relationship with Branwell and

with her father, her sense of isolation and alienation, the intensity of her imaginative functioning and yearning sexuality; [8]

Moglen は *Jane Eyre* の各所に作者の実体験との関連を見出し、作品が直接語るものと同時に、そこから間接的に浮かび上がってくる作者自身の心理も読み取ることが可能であることを示唆している。ここでは Cowan Bridge での経験やガヴァネスとしての生活、そして M. Heger への恋慕などが言及されているが、特に引用の後半部分にある 'more subtle truths' とは、Charlotte 自身すら意識していなかった彼女の深層心理を指している。Moglen が挙げているなかでも、父や弟との微妙な関係、性に対する密かな憧れなどはフェミニズムの問題意識と深く関わってくるものである。

Moglen が上記のような指摘をするのに、Charlotte の伝記的事実を踏まえていたことは明らかである。[9] 心理学を援用することで飛躍的な発展を遂げたフェミニズムにとって、作者の潜在意識を具体的事実によって支える伝記研究は非常に重要なものである。このように、*Jane Eyre* から読み取った深層心理を作者 Charlotte Brontë と効果的に結びつける論拠として、*Life* はフェミニズム研究においても中心的な意味を担っているのである。

また、このころのフェミニズムが指摘した画期的な解釈には、Edward Rochester の先妻 Bertha をめぐるものがあるが、ここでもやはり伝記研究が大きな役割を果たしている。Bertha は Jane とは対照的な人物創造がなされているため、それまで二人を結びつけて考えることはほとんどなかった。しかし、深層心理に注目した結果、フェミニズム批評によって Bertha を Jane の分身と見るという斬新な意見が登場したのである。

Jane と Bertha を同一の人格の意識と無意識の部分とする考え方は、Sandra M. Gilbert と Susan Gubar の共著 *The Madwoman in the Attic* (1979) で一躍有名になったが、Moglen は二人に先立ってこの説を唱えていた。彼女は "Berthe's [sic] importance as an alter ego for Jane is central in the novel" [10] と作品における Bertha の重要性を主張し、さらに別の部分では彼女の役割を次のように定義している。

> Berthe [sic] has from the beginning functioned as a warning against the consequences of Jane's desire for emotional release, her longing to cast aside conventional restraints.... She is the menacing form of Jane's resistance to male authority, her fear of that sexual surrender which will seal her complete dependence in passion. [11)]

Bertha に映し出される Jane の無意識の層、すなわち感情を解放され、因習の鎖を断ち切り、男性の権威に反抗し、情熱の虜となることを恐れないという Jane のもう一つの姿は、そのまま作者 Charlotte Brontë に当てはめてみるとき、さらに一層立体的な構造をもって読む者の心に迫ってくる。Jane が作者 Charlotte 本人であるという見方はすでに 19 世紀からあった。主人公に作者の心理を重ね合わせることが可能であれば、その分身にも作者自身の第二の自我を見出すことができるはずである。Bertha の姿には、牧師の娘、一家の長子としてさまざまな責任を負いながら、因習的な軛から解放されることを熱望していた作者 Charlotte Brontë の姿が重なってくる。そしてまた、男性中心社会で優位に立つ父や弟に対して密かな反抗心を燃え立たせていた Charlotte、官能への憧れを潜在的に抱いていた Charlotte を垣間見ることもできよう。彼女の生涯そのものが、Bertha のもつ怒りや願望とその根底でつながっていくのである。このように、Bertha＝Jane というフェミニズム批評の画期的な解釈が生まれる下地としても、作者 Charlotte Brontë の実人生、そしてそれを伝える *Life* の存在は見逃すことができないのである。

以上のように、Mrs Gaskell の *Life* に始まる伝記的研究は、心理学に基づいたフェミニズム批評において作者 Charlotte の心理考察の材料として、批評家たちに繰り返し参照されてきた。しかしながら、*Life* はこうして受身的に、あるいは一方的にフェミニズムに利用されるだけの参考資料にすぎなかったのであろうか。わたしは、*Life* の執筆にあたった Mrs Gaskell 自身に、*Jane Eyre* とフェミニズムをこれほどまでに強く結びつけた要因の一つがあったと思う。以下、この点について考察してみたい。

フェミニズム批評で言及された伝記的事実のなかでも特にその頻度が高かったのは、やはり父 Patrick Brontë に関するものであった。彼はヴィクトリア朝家

父長制社会の象徴として、エレクトラ・コンプレックスの対象として、Charlotte や Jane の精神分析の論拠となった。なかでも、彼を父権性社会の脅威とみなすものは多かった。

こうした Patrick 像は、実は *Life* のなかで鮮明に描き出されているものなのである。*Life* の第3章には、裏庭でピストルを乱射する、子供たちの靴を燃やす、妻の絹のドレスを切り裂く、といった彼の奇妙で怒りに満ちたエピソードがいくつも数え上げられている。フェミニズムの視点でいえば、当時男性は家父長であるというだけで威圧的な存在となりえた。そのうえさらにこのような奇癖と性質をもった父親となれば、女性にとっては実に驚異的な人物となるであろう。Mrs Gaskell の描いた Patrick は、フェミニストたちにとって女性の精神的抑圧の源となる格好の男性像だったのである。

けれども、*Life* に描かれた Patrick 像があまりに峻厳で奇怪であったために、これが彼の正確な姿を映しているのかという疑問が起こり、後の伝記研究の最大の争点の一つとなっている。このような Patrick 像はどのようにして生まれたのであろうか。

これは、一つには Mrs Gaskell 自身が彼に対して強い先入観を抱いていたことが影響していた。彼女は 1850 年 8 月に初めて Charlotte と知り合った際、二人を引き合わせた Lady Kay=Shuttleworth から、Charlotte の生涯について事実と誤りが相半ばする話を聞いていた。そのなかでやはり Patrick は変人扱いをされており、最初に聞いたこの話の印象が強烈だったためか、Mrs Gaskell のなかには彼に対する拭いがたい偏見が根づいてしまっていたようである。また、Mrs Gaskell の情報収集の過程にも原因があった。彼女が *Life* で描いた Patrick 像は、昔 Brontë 家の使用人をしていて後に彼に解雇された人物からの情報を元にしていた。[12] Patrick に悪感情を抱いていたその使用人は、当然のごとく彼について良いことばかりは語らなかったに違いない。すでに Patrick に対して先入観を抱いていたこともあり、Mrs Gaskell は後に *Life* 執筆の情報収集をした際にも同様の情報をためらうことなく真実とみなすことになったのであろう。

そしてもう一点、奇怪な Patrick 像が生まれた背景には、実はほかならぬ Mrs Gaskell の作為があったとわたしは考える。彼女は *Life* 執筆の準備をする過程で、Charlotte と *Jane Eyre* に対する 'horrid' 'coarse' 'anti-Christian' といった非

難を否定し覆したいという考えを抱いていた。こうした批判は Elizabeth Rigby (Lady Eastlake, 1809-93) が *Quarterly Review* の 1848 年 12 月号で発表した *Jane Eyre* 批評で特に有名であるが、これに対し Mrs Gaskell は、伝記によって Charlotte Brontë が決してそのような女性ではないことを証明したいと切望していた。しかし問題は、彼女自身の目から見ても、*Jane Eyre* がヴィクトリア朝の価値観から逸脱した粗野で野卑な要素を確かに含んでいたことである。そこで Mrs Gaskell がとったのは、こうした要素が Charlotte 個人から生じたものではなく、彼女自身では如何ともしがたい事情、例えばその生まれ育った環境によって、後天的に避けがたく付与されてしまった属性なのだと証明する方法であった。

Mrs Gaskell は Charlotte や彼女の作品に対する非難が、彼女個人には何の責任もないのだと人々を納得させようとした。そのために Charlotte が生まれ育った Yorkshire の特異な地域性を強調し、彼女の父 Patrick を冷酷で異常な人物として創り上げる必要があったのである。Juliet Barker はこうした Mrs Gaskell の執筆意図を指摘している一人であり、彼女は Patrick の人物描写に関して次のように述べている。

> Yet those who knew Patrick well, including his friends and his servants, did not recognize him in Mrs Gaskell's portrait: the words they used to describe him were uniformly 'kind', 'affable', 'considerate' and 'genial'. Like her picture of 'barbaric' Haworth, Mrs Gaskell's portrayal of Patrick as a half-mad recluse who wanted nothing to do with his children was intended to explain away those characteristics of his daughter's writings which the Victorians found unacceptable. [13)]

Mrs Gaskell がこうした Patrick 像を創り出したのは、Charlotte に対する世間の非難を何とか緩和したいという、ヴィクトリア朝の良識を備えた彼女ならではの愛情からであった。しかしデフォルメされた Patrick の姿は家父長の驚異的な肖像として後のフェミニズム批評家の問題意識を強烈に刺激し、Charlotte Brontë と *Jane Eyre* を一層強くフェミニズムと結びつけた。こうして *Life* における Mrs Gaskell の執筆意図は、*Jane Eyre* とフェミニズム批評の接近にさらに

拍車をかけることになったのである。

Mrs Gaskell は実に精力的な情報収集を行ない、伝記作者としてできるだけ正確な Charlotte Brontë 伝を執筆することを信条としていた。しかしそれと同時に彼女は当時の家父長制社会の価値観を念頭におき、そこで規定されている女性のあるべき姿という基準を意識して Charlotte の伝記を執筆した。彼女は *Life* においてよき娘、よき妻、りっぱな女性として Charlotte を描き、そのような女性の作品として *Jane Eyre* を提示しようとした。後のフェミニズムは社会が定める「女性らしさ」という枠を打破することを目指しており、その意味では Mrs Gaskell の執筆姿勢はこれには逆行するものである。しかしながら、まず女性という観点から描く対象を捉え執筆していった彼女の方法は、後のフェミニズムの批評家たちの研究姿勢に先行するものといえよう。

また、Mrs Gaskell は *Life* の執筆によって Charlotte の弁護をしていたわけであるが、こうした女性による女性の救済という図式は、フェミニズム批評においても多くの場合共通して見られるものである。フェミニズム批評は先に述べたように、女性という視点で文学作品を改めて評価し直すことを目的の一つとしている。また、女性であるということで不当な評価を受けた作家やその作品を救い出し、新たな価値を与える文学運動でもある。しかも、Richard Chase や John Maynard といった若干の例外はあるものの、先に挙げた Helen Moglen, Gilbert と Gubar を始め、Patricia Meyer Spacks, Elaine Shoawalter, Barbara Hill Rigney など、[14] *Jane Eyre* をフェミニズムの視点で批評しているのは圧倒的に女性研究家が多い。[15] Mrs Gaskell は *Life* 執筆の時点ですでに、後のフェミニズム批評にしばしば見られる女性作家と女性批評家との関係、女性同志の一種の連帯関係を先取りしていたのである。

このようにして見てみると、Mrs Gaskell は *Life* によって *Jane Eyre* をフェミニズムと強く結びつけるばかりでなく、彼女自身が *Jane Eyre* とその作者を女性という視点で捉えることにより、後のフェミニズム批評の先駆となっているのがわかる。Mrs Gaskell は彼女自身が、実は最も初期のフェミニズム批評家であったということができるかもしれない。

Ⅳ 現　　在

New Criticism の洗礼をくぐり抜け、心理学を援用したフェミニズム批評においては論理的根拠を提供した Mrs Gaskell の *Life* とこれに始まる伝記研究は、今日に至ってさらにその重要性が認識されているという観がある。ここ数年、*Life* に匹敵する大冊の伝記研究書が次々と発表されているからである。R. Fraser, *Charlotte Brontë* (1988), L. Gordon, *Charlotte Brontë: A Passionate Life* (1994), Juliet Barker, *The Brontës* (1994) といった伝記に加え、Margaret Smith 編集による *The Letters of Charlotte Brontë* (1995) も出版され、伝記研究は今まさにルネサンス時代を迎えたかのようである。

ここに挙げた伝記のなかには、例えば先に引用した Barker のように、*Life* とは反対の意見を述べるもの、一部を訂正するものもあるが、これらこそは *Life* の重要性、影響力の大きさを証明するものである。もしも *Life* が価値のないものであれば顧みる必要さえないはずだからである。Brontë の伝記を執筆する者で *Life* を学んでいない者は一人としていないであろう。彼らは *Life* の誤りを訂正し新たな情報を書き加えることにより、伝記研究をより豊かなものに深めていくのである。そしてさらに、フェミニズム批評に見られたようにさまざまな視点での *Jane Eyre* 研究を生み出し、支えているのである。

Mrs Gaskell の *Life* は、単に作者の伝記研究であるに留まらず、*Jane Eyre* 批評の動向にも影響を与え得る存在なのである。今日の充実した新たな伝記研究は、さらに豊かな *Jane Eyre* 批評の誕生を約束しているかのようである。

Notes:

1) 本稿は『ギャスケル論集』第 4 号に掲載された「*Jane Eyre* 批評史における *The Life of Charlotte Brontë*」の続編である。第 4 号では *Life* の出版直後から 1945 年までの約 90 年間における *Jane Eyre* 批評への *Life* の影響を考察した。

2) 斎藤勇、西川正身、平井正穂編『英米文学辞典』(研究社、1992 年) pp.923-4.

3) 1840 年代から 50 年代にかけての Brontë 家に関わる主な出来事には次のようなものがある。

1846	May 21.	*Poems by Currer, Ellis and Acton Bell* 出版
1847	October 16.	*Jane Eyre* 出版
	December	*Wuthering Heights, Agnes Grey* 出版
1848	July	*The Tenant of Wildfell Hall* 出版
	September 24.	Branwell 没
	December 19.	Emily Jane 没
1849	May 28.	Anne 没
1849	October 26.	*Shirley* 出版
1853	January 28.	*Villette* 出版
1855	March 31.	Charlotte 没
1857	March 25.	*The Life of Charlotte Brontë* 出版
	June 6.	*The Professor* 出版

4) R. W. Crump によると、1947 年、48 年に発表された Charlotte, Emily Brontë に関する論文、研究書はそれぞれ 62 と 57 にのぼり、そのほかの年が 30 前後であるのに比べ際立って多いことがわかる。Crump, *Charlotte and Emily Brontë 1955-83: a refrence guide*. (Boston: G. K. Hall & Co., 1986)

5)『英米文学辞典』p.923.

6) 実際には、今世紀のフェミニズム批評そのものは世紀の始め、Virginia Woolf (1882-1941) が *A Room of One's Own* (1929) を発表したときすでに始まっていた。しかしこのころのフェミニズムが女性の精神的自立を主に経済状況という外的な要素との関連で捉えていたのに対し、1960 年代以降のフェミニズム批評はそうした経済的、社会的要素が女性の内面に与える影響の方により注目している。これが両者の大きく異なる点といえる。対社会意識は残しながらも、問題を見つめる視線が一層深く人間の内部に向けられていったことから、1960 年代以降の「新しい」フェミニズムは心理学と結びつきやすかったのであろう。

7) Crump, 'Introduction,' p.xiii. New Criticism の場合と比較すると、フェミニズムに対する *Jane Eyre* 研究の反応がいかに敏速であったかがわかる。フェミニズムと *Jane Eyre* が結びつきやすかったことはこうしたところにも窺えるであろう。

8) Helene Moglen, *Charlotte Brontë: The Self Conceived.* (The University of Wisconsin Press, 1976) p.107.

9) ただし、ここで Moglen が挙げている M. Heger と Charlotte との関係についての記述は *Life* のなかにはない。道徳観念の強いヴィクトリア朝においては、妻子ある男性を思慕することが明らかになれば、それだけで女性にとっては身の破滅を意味した。Mrs Gaskell は Charlotte をさらなる世間の非難から守るため、文中で引用する手紙の位置

を差し替えるなどしてこの事実を隠蔽した。こうした彼女の意図的な事実の歪曲は、後で触れるように Charlotte の父 Patrick の描写にも顕著に見られる。

10) Moglen, p.127.

11) *Ibid.*, p.126.

12) Juliet Barker は Mrs Gaskell が Patrick の情報を得るいきさつについて次のように述べている。

"It was certainly Patrick who bore the brunt of her [the dismissed nurse's] vitriolic accounts of life in the parsonage during Maria's illness. She blamed him for the supposed listlessness of his children:" Juliet Barker, *The Brontës.* (London: Weidenfeld and Nicolson, 1994) p.107.

13) *Ibid.*, p.107.

14) ここで名前を挙げた批評家たちの研究著書のなかで、フェミニズムに基づいた主なものを挙げておく。

R. Chase, "The Brontës, or, Myth Domesticated." In *Forms of Modern Fiction: Essays Collected in Honor of Joseph Warren Beach.* (1948)

J. Maynard, *Charlotte Brontë and sexuality* (1984)

P. M. Spacks, *The Female Imagination: A literary and psychological investigation in women's writing* (1972)

E. Shawalter, *A Literature of Their Own: British Women Novelists from Brontë to Lessing* (1977)

B. H. Rigney, *Madness and Sexual Politics in Brontë, Woolf, Lessing, and Atwood* (1978)

15) フェミニズムが女性であることに捉われるのを拒否した思想であることを考えると、これは皮肉なことかもしれない。